



ゆり新品種 ‘Li-9’ (仮称)

*Lillium* cv. Li-9

花・野菜技術センターでは、従来の品種には見られない小輪でコンパクトな草姿を有する花ゆりの品種を育成しました。エゾスカシユリをルーツに持つアジアティック系品種と本州から朝鮮半島にかけて分布する小輪の野生種の一つとを交配して誕生しました。花が小さく草姿がコンパクトなことから小さな花束やフラワーアレンジメントにも使いやすく、球根が多芽性を有するので1球から約4本の花茎が伸長し、採花本数が大幅に増加します(詳しくは本文で紹介しています)。

北海道発、ゆりの新しい魅力をあなたも感じてみませんか？

## 小輪でコンパクトなゆり新品種「Li-9 (仮称)」花き科

北海道の主要な花き品目であるゆりの切花栽培では「カサブランカ」に代表される大輪のオリエンタル系品種生産への偏りが著しく、近年の嗜好の多様化や量販店での家庭消費など、新たな需要に対応した品種や道外産地との差別化を図れる独自品種の育成が求められています。これらことから、従来品種にない小輪でコンパクトな草姿を持つゆり品種の育成を行いました。

平成6年に道立中央農業試験場でアジアティック系の主力品種である黄色い花色の「モナ」を種子親、花蕾が小さく赤橙色の野生種「チョウセンヒメユリ」を花粉親として交配しました。遠縁で通常の種子獲得が困難なことから同場生物学部細胞育種科(当時)において胚培養を行い、得られた16個体を花・野菜技術センター圃場で養成しました。平成11年に小輪性を有し草姿や収量に優良品が認められた1個体を選抜して球根を増殖し、平成13年から「Li-9」の系統名を付して栽培試験を実施してきました。

「Li-9」の主な特性(下表)ですが、花弁色は鮮橙色で花弁基部に微小な斑点があります。花はすかしゆり型で花径85~96mmの小輪咲きのアジアティック系品種です。「チョウセンヒメユリ」のような不快臭はほとんどなく、花房は総状(段咲き)でコンパクトであり、箱詰めしやすい形状です。球周12~14cmの大きさの球根での草丈は78~81cmでやや短めですが、茎長が長く花房とのバランスは良いと言えます。また、平均的な花蕾数は3.0~4.6個でやや少ないのですが、球根が多芽性を有するため1個の球根から約4本の花茎が伸長し、採花本数は「モナ」などと比較して大幅に増加します(グラフ)。



冷凍貯蔵球を利用した5月定植栽培での特性

系統名	試験年次	定植期	到花日数	草丈(cm)	茎長(cm)	花径(mm)	花蕾数(個/本)	花梗長(cm)	花茎数(本/球)	採花株率(%)	葉枯発生*
Li-9	13	5/17	64	77.6	61.6	96	3.0	4.2	3.9	100	少
	14	5/21	66	81.4	66.0	85	4.6	4.7	4.0	98	少
モナ	13	5/17	67	84.5	58.8	164	5.5	7.3	1.0	100	微
	14	5/21	69	86.5	63.0	162	6.3	7.5	1.0	95	微
チョウセン	13	5/17	57	97.0	80.3	75	6.7	5.2	1.0	60	中
ヒメユリ	14	5/21	57	122.6	95.5	77	10.0	5.1	1.0	50	中

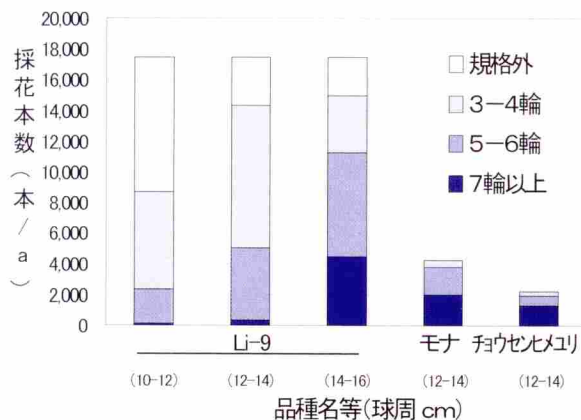
供試球根の球周は12cm以上14cm未満

\*1 葉枯発生: 無-微-少-中-多(観察による評価)

球根の増殖性については、りん片挿しによって1枚のりん片に2.0~2.5個の子球を形成し、「チョウセンヒメユリ」や他のアジアティック系品種より優れています。一年球から切花栽培用となる二年球への肥大倍率も高く、二年球のうち切花栽培に実用的な球周12cm以上球の占める割合は79.3%で、球根肥大性についても優れた特性を持っています。

最後に栽培上の注意点ですが、アジアティック系品種としては葉枯病がやや発生しやすいので、発生動向に注意し適切に防除することが必要です。

道立農業試験場では「Li-9」などの北海道独自の品種開発によって、特色ある産地の育成を支援していきたいと思っています。



ベッド面積あたりの採花本数  
(栽植密度: 4444球/a)



# プリムラ・ジュリアンの秋出し開花調節技術

# 花き科

プリムラ・ジュリアンを秋(10～11月)に開花させるための低温処理法を紹介します。用いた品種は晩生の「早川系」です。播種時期を変え、温度・期間・苗の生育ステージを適切に組み合わせることで、10月以降の安定的な長期出荷が可能になります。

## ① 秋出しのための播種・鉢上げ



播種後は不織布で被覆し灌水

鉢上げ

出荷目標時期のおよそ150日前に288穴のセルトレーに1粒播きします(覆土はしない)。4月末ないし5月初めから5月20日頃までに播種し、本葉が2～4枚の時期に2.5～3号のポリポットに鉢上げします(7月上～中旬)。

## ② 花芽をつくるための低温処理

鉢上げ後、本葉が6枚以上(株の直径が2.5号ポットの直径以上)になったら低温処理を開始します(8月上～中旬。大きな苗ほど効果大)。温度10℃に1週間(猛暑の年はできれば2週間)保ちます(室内灯をつけておくとよい)。低温処理が終了したらハウスに戻し栽培を続けます。処理により花芽形成が促進され、開花は3週間以上早くなります。



低温処理は中央の苗以上の大きさになってから行なうと効果的



蕾形成初期



蕾形成終期



発蕾～開花



5月10日播種・10℃・1週間処理



無処理

## ③ 花芽ができてからの栽培管理

適切なスペーシングにより株の中心部に光を当て、蕾の発育を促します。ハウス内の気温はできるだけ低くなるように管理します。日中の平均気温が13℃を下回らないように注意します。

低温処理を省力的に行なうために、5月初めに72穴セルトレーに播種し、6葉以上になるまで育苗しセルトレーごと低温処理してから鉢上げすることも可能です。ただし、この方法で開花が促進されるのは、処理した苗の半数程度にとどまります。

## さらば宿根草園・・・

5月から10月まで、当センターの宿根草園には180種あまりの草花が咲き乱れた。いろいろな虫たちがその花々につどい、蜜を求め、葉をむさぼり、他の虫を



餌食にし、あるいは羽を休めた。ハチ、トンボ、テントウムシ、カメムシ、ハエ、チョウ、バッタ、アリなどが、ある者はせわしく、他の者は悠然と、それぞれ好みの花を訪れた。様々な姿態と生きざまを見せてくれた彼らのひとりを紹介しよう。キアゲハだ。彼らの子供たちは、1株のセリ科の植物を独り占めにし、葉を食べ尽くすと、ある日忽然と姿を消した。やがて彼らは鮮やかな変身をとげ、軽やかに飛び立っていったのだ。

## 北海道トマトフォーラムを開催しました

3月11日にトマトに関する試験研究成果や産地事例の報告を通じて、道産トマトの振興を図る目的で「北海道トマトフォーラム2003」を開催しました。会場の滝川市文化センター大ホールにはトマト生産者をはじめ、農協、農業改良普及センターなどから350名が集まりました。

当センターからは中玉トマトの品種特性トマト細菌病について報告したほか、施肥、産地づくりなどに関する発表もあり、内容は盛りだくさん。さらにロビーではホクレンのセル苗「北のプラグ」や道内各地のトマトジュースの展示、種苗会社の品種パンフレットの配付もあり、トマトの情報にどっぷりと浸れる一日でした。



## 花・野菜新技術セミナー2003を開催しました

平成14年度の当センターの研究成果（北海道農業試験会議へ当センターから提出し、評価を受けた課題）を発表・伝達する「花・野菜新技術セミナー2003」を、2月26日滝川市文化センターで開催しました。



会場には150人以上の方に参集いただき、発表者が少々上がり気味の場面もありましたが、無事発表を終えることができました。この日のセミナーでは、「花ゆり新品種候補(Li-9)」をはじめとした11課題のうち10課題の発表がありました。

一部の課題については今号と次号の「ふらべじ」で紹介いたします。

## 花・野菜ベーシックセミナーを開催しました

1月27日と2月17日からそれぞれ5日間に渡り、花・野菜ベーシックセミナーを開催しました。このセミナーは、新規参入者及びUターン就農者等を対象に花や野菜栽培に関する基礎知識を習得していただくことを目的としたもので、野菜コースは昨年引き続き2回目、花きコースは今回が初の開催となります。

両コースあわせて39人の受講者の皆さんは非常に熱心で、講義予定時間はしばしばオーバー、各講師は休憩時間も質問責めにあっていました。

2月21日の花きコース閉講式には、(社)北海道農業担い手育成センターの豊岡センター長が臨席され、受講者に熱い励ましの言葉をいただき、好評のうちに終了しました。



### 北海道立 花・野菜技術センター

〒073-0026 北海道滝川市東滝川735番地  
Tel 0125-28-2800 FAX 0125-28-2299

[www.agri.pref.hokkaido.jp/hanayasai/index.htm](http://www.agri.pref.hokkaido.jp/hanayasai/index.htm)

E-mail [hana\\_yasai@agri.pref.hokkaido.jp](mailto:hana_yasai@agri.pref.hokkaido.jp)